



## 保育士養成テキスト「保育原理」における教授内容の分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中谷, 奈津子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00003066">https://doi.org/10.24729/00003066</a>

## 保育士養成テキスト「保育原理」における教授内容の分析

中 谷 奈津子

大阪府立大学人間社会学部

### 要 旨

本研究の目的は、保育士養成課程用に編纂されたテキストの分析を通して、「保育原理」で扱われている教授内容の把握を行うことである。2008年保育所保育指針の改定を受けて発行されたテキスト24冊を対象とし、各テキストの目次を総覧し節ごとの意味内容の類似性に基づき帰納的に分類・命名を行った。抽出された各項目については度数及び出現頻度を算出し、厚生労働省の示す標準シラバスと比較した。

分析の結果「保育の現状と課題」「発達過程に応じた保育」「日本の保育の思想と歴史」の内容のウエイトが大きいことがわかった。「保育原理」で扱われる教授内容は非常に広く、それゆえに各テキストで記載される項目にばらつきがあるものが多く確認された。保育の意義・理念、保育の目標に関する項目に乏しく、「保育原理」を教授するにあたり、今後さらなる探究が望まれることが明らかとなった。

キーワード：保育士養成、保育原理、教授内容、テキスト分析

### 1. 研究の背景と問題の所在

「原理」とは、「ものによって立つ根本法則。認識または行為の根本法則」（新村1983）を指し、「道徳的意味で実践上の基本的規定や理論上いろいろの現象を説明する基本的法則」（梅棹1989）、「すべての現象を成立させる基本法則」であり、「存在の根拠としての実在原理、認識の根拠となる認識原理、行為の規範となる実践的原理」（日本大辞典刊行会1974）があるとされる。これらの定義を援用すれば「保育原理」には、「認識の根拠となる認識原理」と「行為の規範となる実践的原理」が含まれると考えられ、保育を行うにあたりよって立つ本質・意義・理念等からなる基本的考え方と基本的姿勢や方法が含まれていると思われる。

少子化の進行、家庭や地域の子育て力の低下を背景に、2008年保育所保育指針が改定された。保育所への期待が高まり質の高い保育が求められる中で、保育所保育指針においては「第7章 職員の資質向上」が新たに章として規定され、職員一人一人の自己研鑽と研修の必要性、それに伴う施設長の責務も明示されるようになった（厚生労働省2008）。さらに、同年3月には「保育所における質の向上のためのアクションプログラム」が策定されるなど、保育の内容の質の向上は我が国の保育における重要課題となっている（厚生労働省2008）。西村も指摘するように、保育の質の向上に保育士の専門性の確保・向上は必須であり、これらの実現には養成の段階で、保育に関する専門性の基盤を確実に習得することが必要となる（西村2010）。

こうした社会情勢を受けて、2010年には保育士養成課程等検討会により「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」が取りまとめられ、保育士養成や保育現場の諸課題に対応すべく、保育士養成課程カリキュラ

ムの改定が行われている（保育士養成課程等検討会2010）。この改正に伴い、これまで「保育の本質・目的の理解に関する科目」群の4番目に位置していた「保育原理」は、第1番目の科目へと配列が変更され、「教育原理」や「児童家庭福祉」、「社会福祉」等の科目群の中心科目として位置づけられた（汐見2012：128-138）。さらに「保育原理」教授内容の一部が新設の「保育者論」へと移行し、単位数も従来の4単位から2単位に変更されるに至った。「保育原理」を取り巻くこうした状況の変化は、「保育原理」という科目で教授すべき内容の吟味と新たな体系化の必要性を迫るものである。保育における福祉的機能と教育的機能を明確に意識しながら、新しい「保育原理」へのまなざしや「保育学」への地平を切り拓いていくことを、時代や社会が、痛切に求めていることの現れであるとも考えられる。

しかし保育士養成課程における「保育原理」の教授内容については、標準シラバスが設定されているとはいえ、共通理解を得ているとは言いがたい。森上も、保育士養成校の授業者によって必ずしも取り上げる内容が一致していない現状を指摘している（森上・柏女2010）。今後の保育士養成における本科目の重要性を鑑みると、早急に「保育原理」の教授内容の現状把握と内容の吟味を行い、その科目のもつべき独自性を明らかにし、保育士養成の学問体系の根幹をなす教授科目として確立するよう尽力していくことが求められる。

## 2. 研究目的

本研究では、保育士養成課程用に編纂されたテキストの分析から、「保育原理」で扱われている教授内容の把握と内容の吟味を行い、「保育原理」で扱うべき教授内容の体系化を試みることを目的とする。本稿ではまず、2008年の保育所保育指針第3次改訂を受けて発行されたテキストを対象に目次を総覧し、現在提供されている「保育原理」の知識体系を把握するものとする。

## 3. 研究方法

「保育原理」の教授内容の把握を目的として、「保育」「原理」を本題に含む保育士養成課程用に編纂されたテキストの収集を行った。国立情報学研究所（NII）が提供する情報サービスWebcat Plusで示されたもののうち、2008年の保育所保育指針第3次改訂以後に編纂、もしくは改訂を行ったものを抽出し、そのうち入手可能であった24冊を分析の対象とした（20130701検索実施）。各テキストの目次を総覧し、「節」単位のまとまりを分析単位とした（総計952単位）。本研究では、「節」がテキスト内での一定の重みづけを示すものと判断し、節ごとの意味内容の類似性に基づき、帰納的に分類・命名を行うものとする。よって節のタイトルに挙げられず、節の下位項目（項）に含まれるものは分析の対象とならない。抽出された各項目については、度数及び出現頻度（度数÷対象冊数）を算出した。さらに保育士養成課程等検討会の示す標準シラバスと比較し体系的把握を行った。

## 4. 結果

細目239、小項目85、中項目29、大項目11に分類された（表1）。大項目として集約されたものを【 】, 中項目『 』、小項目[ ], 細目〈 〉と表記する。

### （1）大項目の特徴

#### ①【保育の意義】（度数小計60、出現頻度2.49（以下同順で記載））

【保育の意義】は『保育の意義』、『保育の理念と概念』、『児童の最善の利益を考慮した保育』という3つの中項目が集まり構成するものである。それぞれの内容を概観すると、『保育の意義』（10、0.41）には、全般的

なとらえ方だけでなく、日本国憲法、教育基本法に基づくものも集約された。『保育の理念と概念』（39、1.63）については、保育が目指すものや目的といった理念的なものと、語義や概念の整理に関わるものとは分類された。『児童の最善の利益を考慮した保育』（11、0.46）では、子どもの権利そのものに関するもの、及び児童の最善の利益を考慮した保育についての項目がみられた。それぞれの度数、出現頻度から、『保育の理念と概念』については、おおよそすべてのテキストで取り上げられていることがうかがえるが、保育の意義、児童の最善の利益を考慮した保育については、テキスト間で記述の有無にばらつきがあることがうかがえた。

## ②【保育制度の概要】（53、2.21）

【保育制度の概要】は『保育制度の概要』、『保育所保育指針・幼稚園教育要領』という2つの中項目が集まり構成するものである。『保育制度の概要』（39、1.63）は、児童福祉法、保育所・幼稚園の目的、多様な保育の場（家庭、保育所、幼稚園、認定こども園、認可外保育施設、家庭的保育等）等を含むものである。特に保育施設の種類については、それぞれに節を立てて説明しているものも見られた。出現頻度から、『保育制度の概要』についてはどのテキストでも扱う内容であることがうかがえる。

## ③【保育の基本】（165、6.87）

【保育の基本】は、『保育の基本』、『養護と教育の一体性』、『環境を通して行う保育』、『発達過程に応じた保育』、『家庭及び地域、小学校との連携』という5つの中項目から構成される。『保育の基本』（8、0.33）は、保育所保育の基本、保育所・幼稚園保育の特徴を含むものとした。『養護と教育の一体性』（8、0.33）では〈養護とは〉、〈教育とは〉とそれぞれに節を構成しているものから〈養護と教育〉が一体的に構成しているのがみられた。『環境を通して行う保育』（47、1.96）では、物的環境、人的環境等の保育の環境、環境を通して行う保育、実際の援助の方法等が含まれている。『発達過程に応じた保育』（71、2.96）では、発達のとらえ方や発達理論、乳幼児の発達の特性と保育、障害のある子どもと保育が集約された。『家庭及び地域、小学校等との連携』（31、1.29）では、連携の意義と課題、他職種との連携も含めるものとした。ここでは、『発達過程に応じた保育』においてもっとも出現頻度が高く、次いで『環境を通して行う保育』、『家庭及び地域、小学校等との連携』、『養護と教育の一体性』の順となっている。発達過程や環境、連携については、各テキストにおいていくつかの節を構成していることがうかがえるが、養護と教育については、テキストによってばらつきが大きいことがわかった。

## ④【保育の専門性】（64、2.67）

【保育の専門性】は、『保育者の資格と責務』（15、0.63）、『保育者の倫理観と専門性』（36、1.50）、『保育所の社会的責任』（13、0.54）という中項目から構成される。『保育所の社会的責任』には、[施設長の役割]、[保育の質と評価]、[苦情解決]に関する内容が含まれている。出現頻度から『保育者の倫理観と専門性』については、各テキストで触れられていることがうかがえるが、その他の項目については差があることがうかがえた。

## ⑤【保育の目標】（23、0.96）

【保育の目標】は、[保育の目標]、[望ましい未来をつくり出す力の基礎]という小項目を内包している。大項目では23度数が確認されているが、多くのテキストで保育の目標が共通に記載されているとは言い難い。細目から[望ましい未来をつくり出す力の基礎]を構成する要素それぞれを説明する節も確認されており、テキストによって【保育の目標】の取り上げられ方に大きな差があることがうかがえる。

## ⑥【保育の方法】（99、4.14）

【保育の方法】は、『保育の方法』、『健康・安全』、『子ども理解』、『個と集団』、『生活・遊びによる総合的な保育』という中項目から成る。『保育の方法』（39、1.63）では、保育方法の意義や原理、保育の形態等があげられている。『生活・遊びによる総合的な保育』（25、1.04）では、保育における子どもの生活、遊び、総合的な保育につい

表1 保育原理テキスト内容の類型化

大項目	度数	出現頻度	中項目	度数	出現頻度	小項目	度数	細目	度数			
保育の意義	60	2.49	保育の意義	10	0.41	保育の意義	10	保育の意義 日本国憲法 教育基本法	8 1 1			
			保育の理念と概念	39	1.63	保育の理念	14	保育の理念 保育が目指すもの	5 9			
						保育の概念	10	保育の概念 保育の意義	4 6			
						保育の理念と概念	11	保育とは何か 保育の理念と概念	9 2			
			児童の最善の利益を考慮した保育	11	0.46	子どもの最善の利益と保育	11	保育の目的 子どもの最善の利益と保育	4 6 5			
保育制度の概要	53	2.21	保育制度の概要	39	1.63	保育制度の概要	6	保育制度の概要 保育施設(幼保等)の目的	3 3			
						保育所保育の目的	2	保育所保育の目的 保育所の目的	1 1			
						幼稚園教育の目的	1	幼稚園教育の目的	1			
			保育所保育指針・幼稚園教育要領	14	0.58	多様な保育の場	30	4	保育の場	9	保育の場 家庭における保育 施設保育	4 2 2
									保育所と幼稚園	4	保育所と幼稚園 認定こども園 保育所・幼稚園・認定こども園 認可外保育施設	4 5 5 1
保育所保育指針	4	4	発達的保育	4	4	4	4	4				
幼稚園教育要領	4	4	保育所保育指針・幼稚園教育要領	6	6	6	6	6				
保育の基本	165	6.87	保育の基本	8	0.33	保育の基本	8	保育の基本 保育所保育の基本 保育所・幼稚園の保育の特徴	4 2 2			
			養護と教育の一体性	8	0.33	養護と教育の一体性	8	養護とは 教育とは 養護と教育	1 1 6			
			環境を通して行う保育	47	1.96	環境を通して行う保育	11	11	環境を通して行う保育 保育環境の意義 環境との相互作用	7 3 1		
						保育の環境	28	28	保育の環境 物的環境 人的環境 物的環境と人的環境の関連 時間・空間 自然環境	7 4 11 1 3 2		
						環境構成と援助の実践	8	8	環境の再構成 環境構成と援助の実践	1 7		
			発達過程に応じた保育	71	2.96	発達とは	10	10	発達とは 発達理論	6 4		
						乳幼児の発達	23	23	乳幼児の発達の特性 心の発達 身体の発達 心と身体との発達 ことばの発達	15 2 1 2 1		
						乳幼児の発達と保育	23	23	保育指針における子どもの発達 乳幼児の発達と保育 発達への援助 乳幼児の発達と教育課程 年齢からみた子どもの姿と保育者のかかわり 発達の個人差に応じた保育 発達に関する保育課題	2 9 3 2 5 1 3		
			家庭及び地域、小学校等との連携	31	1.29	連携の意義と課題	3	3	連携の意義 連携の課題	1 1		
						家庭及び地域との連携	15	15	家庭との連携 地域との連携 家庭と地域との連携	10 3 2		
小学校との連携	11	11				小学校との連携 小学校との連携の意義	2 9					
保育の専門性	64	2.67	保育者の資格と責務	15	0.63	保育者の資格	8	保育者の資格 保育者になるための学び	3 5			
			保育者の倫理観と専門性	36	1.50	保育者の専門性	16	16	保育者の専門性 保育者の資質 保育の専門性と倫理観	11 3 2		
						保育者の倫理観	3	3	保育者の倫理観	2		
			保育所の社会的責任	13	0.54	施設長の役割 保育の質と評価 苦情解決	1 10 2	1 10 2				
保育の目標	23	0.96	保育の目標	23	0.96	保育の目標	8	保育の目標 保育の目標・方法・内容 望ましい未来をつくり出す力 生きる力の基礎 自信 社会的規範意識	7 1 1 5 1 1 1			
						望ましい未来をつくり出す力の基礎	15	15	思考力 コミュニケーション力 健康な身体 協同する力 健康な子ども	1 1 1 1 3		
保育の方法	99	4.14	保育の方法	39	1.63	保育の方法	22	保育の方法 保育の方法の意義 保育の方法の原理 援助方法・指導方法 保育の方法と子どもの体験	6 1 9 5 1			
						保育の形態	17	17	保育の形態 保育の形態と子どもの活動 保育の形態と保育の方法	13 2 2		
			健康・安全	9	0.38	健康・安全	9	9	健康・安全 子どもの安全	3 4		
			子ども理解	21	0.88	子ども理解	21	21	子ども理解の意義 子ども理解の方法 子どもを見る目 保育における子ども理解	2 4 6 5		
						個と集団	5	0.21	個と集団	5	5	個と集団
生活・遊びによる総合的な保育	25	1.04	保育における子どもの生活	4	4	保育における子どもの生活 保育における子どもの生活	2 2					
保育における子どもの遊び	11	11	遊びの理論 遊びの意義 遊びの援助	1 6 4	1 6 4							
生活・遊びによる総合的な保育	10	10	保育内容としての生活と遊び 遊びによる総合的な保育	4 6	4 6							

保育士養成テキスト「保育原理」における教授内容の分析（中谷）

大項目	度数	出現頻度	中項目	度数	出現頻度	小項目	度数	細目	度数			
保育の内容	48	2.00	保育の内容	48	2.00	保育の内容とは	24	保育内容の定義 保育内容の構造 保育内容の基本 保育所の保育内容 幼稚園の保育内容 保育内容の考査	4 4 7 2 2 5			
						「ねらい」と「内容」	7	保育のねらい 保育のねらいと内容	1 6			
						養護に関わる内容	2	養護に関わる内容	2			
						5領域	15	5領域 領域とねらい・内容	12 3			
						保育の計画	12	保育の計画の意義 保育の計画	1 11			
保育の計画と評価	124	5.17	保育の計画	66	2.75	保育課程・教育課程	23	保育課程・教育課程 保育課程・教育課程の意義 保育課程・教育課程の編成 保育課程・教育課程の実際 教育課程の評価	9 3 9 1 1			
						指導計画の作成	31	指導計画 指導計画の意義 指導計画の作成 指導計画の実際 長期指導計画の作成 中期指導計画の作成 短期指導計画の作成 保育実践を支える視点	6 3 10 7 2 2 2 4			
						保育の実践	24	24	保育の実践 園行事 教材 保育者同士の連携	11 2 3 4		
						保育の記録	6	6	保育の記録の意義 保育の記録	2 4		
						保育の評価	22	22	保育の評価の意義 保育の評価 保育の振り返りの方法 保育の振り返りの意義 保育の振り返り	11 2 2 1 7		
			保育の記録と評価	4	4	保育の記録と評価	4					
			計画・実践・記録・評価・改善の循環	2	2	計画・実践・記録・評価・改善の循環	2					
			保育の思想と歴史	128	5.33	諸外国の保育の思想と歴史	61	2.54	子ども親の変遷	13	子ども親とは 子ども親の変遷 子どもの発見	6 4 3
									諸外国の保育の思想	12	諸外国の保育の思想 児童中心主義保育 イギリスの保育思想 ドイツの保育思想 フランスの保育思想	8 1 1 1 1
									諸外国の保育の歴史	11	諸外国の保育施設の誕生と発展 諸外国の保育の歴史	6 5
諸外国の先駆者たち	25	コメニウス エラスムス ルソー ペスタロッチ オーエン フレーベル マクミラン姉妹 モンテッソーリ エリク・ケイ デューイ							3 1 3 3 2 4 3 1 4			
日本の保育の思想	5	5							日本の保育の思想	5		
日本の保育の歴史	9	9				日本の保育の歴史	9					
日本の保育施設の誕生と発展	11	11				幼稚園の成立 保育所の成立 日本の保育施設の誕生と発展	3 2 6					
日本の先駆者たち	12	12				日本の保育を築いた人々 関係三 和田実 奥徳吉 倉橋三 野口幽香 豊田美雄	5 1 1 1 2 1 1					
保育制度の変遷	20	20				江戸の子育て 明治の保育制度 大正の保育制度 戦前の保育制度 戦後の保育制度	3 5 3 2 7					
保育内容の変遷	10	10				保育内容の変遷	10					
保育の現状と課題	174	7.25	諸外国の保育の現状と課題	19	0.79	諸外国の保育の現状と課題	19	諸外国 諸外国の保育 フランスの保育 スウェーデンの保育 アメリカの保育 諸外国の保育制度 諸外国の保育の現状と課題	2 2 2 2 2 3 4			
						社会背景	28	28	社会環境の変化 子どもを取り巻く環境 現代社会と子育て メディア環境	8 7 2 2		
						子育て支援	49	49	地域社会と子育て 子育て家庭の変化 子育て家庭の困難 男女共同参画社会 子育て支援の必要性 子育て支援政策	4 1 2 2 4 8		
						子育て支援拠点としての保育施設	15	15	地域に根づく保育 保育所の子育て支援 幼稚園の子育て支援 子育て支援拠点としての保育施設 地域支援の課題	2 2 2 8 4		
						相談援助体制	13	13	相談援助体制 相談援助体制の基本原則 相談援助者としての保育者 保育施設における相談援助 虐待への対応	1 1 5 2 1		
			日本の保育の現状と課題	29	29	29	日本 日本の保育の現状と課題 日本の保育制度の現状と課題 保育所の現状と課題 幼稚園の現状と課題	2 14 5 4 4				
			保育への期待の拡大	9	9	9	保育への期待 保育者への期待の拡大 保育施設への期待	3 4 2				
			保育ニーズの多様化	16	16	16	保育ニーズの多様化	16				
			待機児童問題	2	2	2	待機児童問題	2				
			幼保一体化	5	5	5	幼保一体化	5				
保育者の労働問題	2	2	2	在職と離職 労働者としての保育者	1 1							
保育の国際化	3	3	3	保育の国際化	3							
新しい保育の創造	12	12	12	新しい保育の創造	12							
その他	14	0.58	その他	14	0.58	その他	14	0.58				
合計	952	39.67		952	39.67		952	39.67				

て取り上げられている。また『個と集団』（5、0.21）については出現頻度の低さが浮き彫りになった。

⑦【保育の内容】（48、2.00）

【保育の内容】は、[保育の内容とは]、[「ねらい」と「内容」]、[養護に関する内容]、[5領域]という小項目から成る。[保育の内容とは]では、保育内容の定義、構造、基本等が含まれている。

⑧【保育の計画と評価】（124、5.17）

【保育の計画と評価】は、『保育の計画』、『保育の実践』、『保育の記録と評価』という中項目から構成される。『保育の計画』（66、2.75）では、[保育の計画]、[保育課程・教育課程]、長期・中期・短期を含む[指導計画の作成]が集約され、『保育の実践』（24、1.00）では、保育実践を支える視点や保育の実践事例、園行事などが内包されている。『保育の記録と評価』（34、1.42）では、[保育の記録]、[保育の評価]、[計画・実践・記録・評価・改善の循環]があげられた。大項目の出現頻度は5.17と他の大項目と比べ高く、保育原理の教授内容としてかなりのウエイトを占めていることがうかがえる。

⑨【保育の思想と歴史】（128、5.33）

【保育の思想と歴史】は、『諸外国の保育の思想と歴史』『日本の保育の思想と歴史』に大きく分けられる。『諸外国の保育の思想と歴史』（61、2.54）では、子ども観の変遷、保育の思想、歴史、先駆者たちが含まれている。『日本の保育の思想と歴史』（67、2.79）では、日本の保育施設の誕生と発展、先駆者たち、保育制度・保育内容の変遷を内包している。大項目の出現頻度は5.33と高く、どのテキストにおいても保育の歴史に触れていることが明らかになった。また日本と諸外国の度数にもほとんど差はなく、特に保育の思想においては諸外国の影響を強く受けていることがうかがえた。

⑩【保育の現状と課題】（174、7.25）

【保育の現状と課題】では、『諸外国の保育の現状と課題』、『社会背景』、『子育て支援』、『日本の保育の現状と課題』に集約された。『諸外国の保育の現状と課題』（19、0.79）においては「諸外国」と範囲を広く扱うものもあれば、フィンランドやスウェーデン、アメリカなど具体的な国名が節となっているものも見られた。『社会背景』（28、1.17）では、日本の子どもを取り巻く環境やメディア環境などの[社会環境の変化]、地域や子育て家庭そのものの変化、男女共同参画社会といった国際的な社会動向といった内容を含んでいる。『子育て支援』（49、2.04）では、子育て支援の必要性和政策が示され、保育施設における子育て支援、地域全体の相談援助体制があげられている。『日本の保育の現状と課題』（78、3.25）では、広く[日本の保育の現状と課題]としてとらえているものから[保育への期待の拡大]、[保育ニーズの多様化]、[待機児童問題]、[幼保一体化]、[保育者の労働問題]、[保育の国際化]等、時代の情勢を反映した節が示されていた。大項目の出現頻度は7.25と最も高く、この分野が保育原理の教授内容として多くを占めていることがわかった。

## （2）度数と出現頻度からの把握

以上の結果を出現頻度順に表示したものが表2、表3である。

表2 大項目別・出現頻度

No	大項目	度数	出現頻度
1	保育の現状と課題	174	7.25
2	保育の基本	165	6.87
3	保育の思想と歴史	128	5.33
4	保育の計画と評価	124	5.17
5	保育の方法	99	4.14
6	保育の専門性	64	2.67
7	保育の意義	60	2.49
8	保育制度の概要	53	2.21
9	保育の内容	48	2.00
10	保育の目標	23	0.96
11	その他	14	0.58
	合計	952	39.67
	平均	86.55	3.61

表3 中項目別・出現頻度

No	中項目	度数	出現頻度
1	日本の保育の現状と課題	78	3.25
2	発達過程に応じた保育	71	2.96
3	日本の保育の思想と歴史	67	2.79
4	保育の計画	66	2.75
5	諸外国の保育の思想と歴史	61	2.54
6	子育て支援	49	2.04
7	保育の内容	48	2.00
8	環境を通して行う保育	47	1.96
9	保育の方法	39	1.63
10	保育の理念と概念	39	1.63
11	保育制度の概要	39	1.63
12	保育者の倫理観と専門性	36	1.50
13	保育の記録と評価	34	1.42
14	家庭及び地域、小学校等との連携	31	1.29
15	社会背景	28	1.17
16	生活・遊びによる総合的な保育	25	1.04
17	保育の実践	24	1.00
18	保育の目標	23	0.96
19	子ども理解	21	0.88
20	諸外国の保育の現状と課題	19	0.79
21	保育者の資格と責務	15	0.63
22	保育所保育指針・幼稚園教育要領	14	0.58
23	その他	14	0.58
24	保育所の社会的責任	13	0.54
25	児童の最善の利益を考慮した保育	11	0.46
26	保育の意義	10	0.41
27	健康・安全	9	0.38
28	保育の基本	8	0.33
29	養護と教育の一体性	8	0.33
30	個と集団	5	0.21
	合計	952	39.67
	平均	31.73	1.32

大項目別では、【保育の現状と課題】、【保育の基本】、【保育の思想と歴史】、【保育の計画と評価】が上位を占め、下位には【保育の目標】、【保育の内容】、【保育制度の概要】が位置する。中項目別では、上位に『日本の保育の現状と課題』、『発達過程に応じた保育』、『日本の保育の思想と歴史』、『保育の計画』、『諸外国の保育の思想と歴史』が、下位に『個と集団』、『養護と教育の一体性』、『保育の基本』、『健康・安全』、『保育の意義』、『児童の最善の利益を考慮した保育』が位置する。

(3) 標準シラバスと小項目の対比

標準シラバスと該当する章項目を対比させ、標準シラバスの章立てに則って章ごとの出現頻度を算出したところ、表4のとおりとなった。ここでは標準シラバスに該当しない小項目を含まないため、総度数は812単位となる。

表4 標準シラバスとの小項目の比較

標準シラバス	小項目	度数	小計	出現頻度	計	出現頻度	
1. 保育の意義	保育の意義	10	10	0.41	108	4.49	
	(1) 保育の理念と概念	保育の理念	14	35			1.45
		保育の概念	10				
		保育の理念と概念	11				
	(2) 児童の最善の利益を考慮した保育	子どもの最善の利益と保育	11	11			0.46
	(3) 保護者との協働	...	0	0			0
	(4) 保育の社会的意義	保育の目的	4	4			0.17
	(5) 保育所保育と家庭的保育	保育制度の概要	6	38			1.58
		保育所保育の目的	2				
		多様な保育の場	30				
保育所保育指針		4					
(6) 保育所保育指針の制度的位置づけ	保育所保育指針・幼稚園教育要領	6	10	0.42			
2. 保育所保育指針における保育の基本	保育の基本	8	8	0.33	203	8.46	
(1) 養護と教育の一体性	養護と教育の一体性	8	8	0.33			
(2) 環境を通して行う保育	環境を通して行う保育	11	47	1.96			
	保育の環境	28					
	環境構成と援助の実際	8					
(3) 発達過程に応じた保育	発達とは	10	71	2.96			
	乳幼児の発達	23					
	乳幼児の発達と保育	23					
(4) 保護者との緊密な連携	障害のある子どもと保育	15	18	0.75			
	連携の意義と課題	3					
(5) 倫理観に裏付けられた保育士の専門性	家庭及び地域との連携	15	51	2.13			
	保育者とは	4					
	保育者の資格	8					
	保育者の専門性	16					
	保育者の倫理観	3					
	保育者の責務	3					
3. 保育の目標と方法	保育の目標	8	30	1.25			
	保育の方法	22					
(1) 現在をもっともよく生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培う	望ましい未来をつくり出す力の基礎	15	15	0.63	199	8.30	
(2) 生活と遊びを通して総合的に行う保育	保育における子どもの生活	4	25	1.04			
	保育における子どもの遊び	11					
	生活・遊びによる総合的な保育	10					
(3) 保育における個と集団	個と集団	5	5	0.21			
(4) 計画・実践・記録・評価・改善の過程の循環	保育の計画	12	124	5.17			
	保育課程・教育課程	23					
	指導計画の作成	31					
	保育の実践	24					
	保育の記録	6					
	保育の評価	22					
4. 保育の思想と歴史の変遷	...	0	0	0	128	5.33	
(1) 諸外国の保育の思想と歴史	子ども観の変遷	13	61	2.54			
	諸外国の保育の思想	12					
	諸外国の保育の歴史	11					
	諸外国の先駆者たち	25					
(2) 日本の保育の思想と歴史	日本の保育の思想	5	67	2.79			
	日本の保育の歴史	9					
	日本の保育施設の誕生と発展	11					
	日本の先駆者たち	12					
	保育制度の変遷	20					
	保育内容の変遷	10					
5. 保育の現状と課題	...	0	0	0	174	7.25	
(1) 諸外国の保育の現状と課題	諸外国の保育の現状と課題	19	19	0.79			
(2) 日本の保育の現状と課題	日本の保育の現状と課題	29	155	6.46			
	社会環境の変化	19					
	地域の変化	4					
	子育て家庭の変化	3					
	男女共同参画社会	2					
	子育て支援政策	8					
	子育て支援の必要性	13					
	子育て支援拠点としての保育施設	15					
	相談援助体制	13					
	保育への期待の拡大	9					
	保育ニーズの多様化	16					
	待機児童問題	2					
	幼保一体化	5					
	保育者の労働問題	2					
保育の国際化	3						
新しい保育の創造	12						
	合計	812	812	33.83	812	33.83	
	平均	11.28	33.83	1.41	162.40	6.77	

「1. 保育の意義」に該当したものは、[幼稚園教育の目的][幼稚園教育要領]を除く大項目【保育の意義】【保育制度の概要】に含まれる小項目であった。「2. 保育所保育指針における保育の基本」では、地域や小学校との連携、保育所の社会的責任に関する小項目を除く【保育の基本】【保育の専門性】における小項目がほぼ該当することとなった。「3. 保育の目標と方法」に該当するものは、大項目【保育の目標】【保育の計画と評価】、中項目『生活・遊びによる総合的な保育』『個と集団』に含まれる小項目であった。「4. 保育の思想と歴史の変遷」には、大項目【保育の思想と歴史】における小項目が、「5. 保育の現状と課題」には、大項目【保育の現状と課題】における小項目がすべて該当した。

「保育原理」のテキストでは、標準シラバスに設定された項目の中でも、「2. 保育所保育指針における保育の基本」に関する内容がもっともボリュームが大きく、中でも「発達過程に応じた保育」の内容に重きが置かれている（出現頻度2.96）。しかし同じく「2. 保育所保育指針における保育の基本」に位置していても、「養護と教育の一体性」の出現頻度は0.33と低いことがわかった。次いで、「3. 保育の目標と方法」、「5. 保育の現状と課題」に関する内容が多くを占めている。「3. 保育の目標と方法」では、「計画・実践・記録・評価・改善の過程の循環」の出現頻度は5.17と圧倒的多数を占める一方で、「現在を最も良く生き、望ましい未来をつくる力の基礎」は0.63、「保育における個と集団」は0.21と少数となっている。その他、「1. 保育の意義」における「保護者との協働」に該当する小項目はなく、さらに「保育の社会的意義」に該当する項目の出現頻度は0.17と極めて低い値であった。

## 4. 考察

### (1) 広い教授内容～他科目との重複内容の整理の必要性～

「保育原理」のテキスト内容の整理から、標準シラバスを超える教授内容が提示されており、実際にそこで扱われる教授内容は非常に範囲の広いものであることが明らかとなった。【保育の思想と歴史】については、出現頻度や抽出された細目などから、教授内容が一定程度共通しているのではないかと推察されたが、それ以外の部分については大項目間や大項目間の内部で出現頻度に大きな開きがあり、広範囲の教授内容がゆえ、各テキストで記載される項目にばらつきが多くみられるものと思われた。中項目で出現頻度が1を下回るものは全体の4割を超えていることから（「その他」を除く全中項目29のうち出現頻度が1以下のものは12）、保育原理で扱うべき内容への共通理解が図られていないこと、そのことから派生するテキスト執筆者の恣意性が見て取れる。「保育原理」を保育の中核として位置づけるのであれば、中核となる教授内容に何が必要かをより吟味し、教授内容そのものの質をさらに高めていくことが求められる。その際、保育士養成課程カリキュラムの改定に伴い新設された「保育者論」「保育課程論」「保育の心理学Ⅰ」「保育内容総論」等との重複部分の整理も必要となる。

### (2) 多く取り上げられている内容と歴史的経緯

教授内容として多く取り上げられているのは、【保育の現状と課題】【保育の思想と歴史】『発達過程に応じた保育』『保育の計画』であった。保母養成機関における専門科目の適正な教授を期して保母養成専門科目教授内容ソースブック（改訂版）が刊行されているが（厚生省児童家庭局1972）、当時の「保育原理Ⅰ」には、「保育の原理」を教授する項目群の中に「乳幼児の発達的特質」が、「保育の場」を教授する項目群の中に「保育の歴史」に関する項目が位置づけられていた。さらに「保育原理Ⅱ」の内容は、そのほとんどが保育の計画に関するもので占められていた。現在の教授内容もまた、その時代の養成の在り方に大きく影響されているものと思われる。2001年の「今後の保育士養成課程等の見直しについて」で発表された「保育原理」の標準シラバ

スにおいては、多様な保育ニーズへの対応や子育て支援、相談援助体制に関する内容が新設されている。今回の分析ではこれらの内容は「保育の現状と課題」に含まれており、ここでも歴史的経緯がうかがえる結果となった。その時代の標準シラバスが、どのような社会的背景をもとに作成され、それが実際の教授内容にどのように影響を及ぼしてきたかについても、今後検討する必要がある。

### （3）脆弱な保育の意義・理念～保育の認識原理、実践的原理の追究の必要性～

先に、原理には実在原理、認識原理、実践的原理があり、「保育原理」には認識原理と実践的原理が含まれるのではないかと提示した。認識とは「ある物事を知り、その本質・意義などを理解すること」（ジャパナレッジ）をいう。つまり、保育に関する本質・意義・理念等から成る基本的考え方を意味するものと思われる。しかし、今回の教授内容においては保育の意義や理念に関する項目は抽出されたものの、『保育の意義』の出現頻度は0.41であり、『保育の理念と概念』では概念と混在しつつ述べられており、そこに重きを置いているとは考えにくい。「児童の最善の利益」は保育の大前提であり、福祉や教育にも欠かせない視点であるが、「児童の最善の利益を考慮した保育」の出現頻度は0.46という低さである。さらに今回の分析では、それらの内容がどのように語られているかも定かではない。「保育原理」を考えるにあたり、我が国の現代社会を背景とした保育の意義や理念の提唱は重要な論点であると思われる。本分野の知見を整理し、保育の意義や理念と照らし合わせながら保育原理の教授内容に導入していくことも望まれるものとなる。

さらに実践的原理については【保育の基本】や【保育の方法】に内包されていると思われるが、それらがどのように独立しリンクしうるのか等の整理と具体的提示の必要性がある。

### （4）「保育の目標」を深める視点の必要性

保育所保育指針解説にも述べられているように、保育の在りようは様々であっても、保育の目標はすべての保育所に共通するものであり（厚生労働省2008）、「保育原理」を考えるにあたり、「保育の目標」はその根幹をなすものとして重要である。本論では、大項目として【保育の目標】が抽出されたが、その出現頻度は0.96と決して高いものではない。【保育の目標】に関する細目を概観するに、望ましい未来をつくり出す力の基礎を構成する要素を説明しているものもうかがわれ、すべてのテキストにおいて保育の目標をしっかりとした基礎にして次なる方法論を展開しているとは考えにくい現状であった。近年保育の「省察」に関心が寄せられるようになったが、省察とは「自分自身をかえりみて、そのよしあしを考えること」とされる（ジャパナレッジ）。保育士の思考力・判断力を高め、評価の内なる指針を構築するためにも「現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎」とは一体何を意味するのかを学生自らが深く考察する節などが設けられてもよいのではないかと考える。また保育所保育指針解説では保育の目標を6つの側面から説明しているが、保育の目標として、それら側面を統合する子どもの「個」としての主体性の育ちをより明確に提示し、保育士自身が長期的視野や生涯発達の見通しを持つことの必要性、人格形成の基礎としての保育の価値を述べていくことも考慮されてよいのではないかと考えられた。

## 5. まとめと今後の課題～ボトムアップの理論の構築と共有を視野に～

保育という営みは、保育施設（ここでは保育所）という保育環境を土台としながら、目の前の子どもと家庭の日常の「生」に直接関わり、関係を継続させ、互いに生活を営んでくものであり、「抽象」論より「具体的」対応が日々求められる分野である。しかしそこに共通の原理原則が必要でないわけではなく、関わる子どもや家族が生き生きとした表情を見せてくれるようになるには、どの実践にも共通した「保育の原理」があると

考える。私たちは暗黙の了解でそれを既に共有しているのかもしれないが、「保育原理」の教授内容を整理し、「保育の原理」をよりわかりやすく次世代へ継承させていく必要がある。そしてそこで学ぶ原理原則が一つ一つの実践に息づき、ともに子どもの健やかな育ちや家庭の安寧を目指していくことに教授内容体系化の意味がある。

今後の課題として、今回の分析では十分に明らかにできなかったが、「保育原理」の教授内容は旧標準シラバスや保育所保育指針改定の影響も受けているのではないかと思われ、保母養成発足の時期からのテキスト分析を行う必要があると思われた。また「子ども理解」「子育て支援」など分類に悩む項目もみられた。分類の妥当性についても課題が残る。保育の意義や理念、専門性など抽象度の高い言葉が使われている節については、その内容を具体的に把握する必要性もあげられる。また保育所保育指針以外で「保育の原理」がどのように語られているかの検討についても今後の課題としたい。

### 参考・引用文献

- 梅棹忠夫・金田一春彦・坂倉篤義他（1989）『講談社カラー版日本語大辞典』講談社
- 厚生省児童家庭局（1972）『保母養成専門教科目教授内容ソースブック（改訂版）』日本児童福祉協会
- 厚生労働省（2008）『保育所保育指針解説書』フレーベル館
- 厚生労働省（2008）「保育所における質の向上のためのアクションプログラム」雇児発第0328001号：別添4
- 汐見稔幸監著（2012）『保育学を拓く』萌文社
- ジャパンナレッジ（2013）『デジタル大辞泉』小学館
- 新村出（1983）『広辞苑第3版』岩波書店
- 西村真実（2010）「「乳児保育」教授内容についてのテキスト項目の検討」『大阪成蹊短期大学研究紀要』（7）63-74
- 日本大辞典刊行会（1974）『日本国語大辞典第7巻』小学館
- 保育士養成課程等検討会（2010）「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」
- 保育士養成課程等検討委員会（2001）「今後の保育士養成課程等の見直しについて（報告）」
- 森上史朗・柏女霊峰編（2010）『保育用語辞典（第6版）』ミネルヴァ書房

# Analysis of Contents of “Principle of Nursery Care and Education” in Textbooks for Training of Nursery Teachers

Natsuko Nakatani

Osaka Prefecture University

## Abstract

This study is aimed to grasp the contents of textbooks of “Principle of Nursery Care and Education”, which are used in the training of nursery teachers. The subjects consist of 24 textbooks which were published in response to the revision of the “Guidelines for Nursery Care at Day Nursery” in 2008. I made a survey of the table of contents of each book. The similar sections were put together into a category and were named. Subtotal and frequency of all categories were calculated and compared with the items of standard syllabus given by the Ministry of Health, Labor and Welfare.

As a result, the contents of textbooks seemed to account for a great proportion of “present situations and problems in early childhood care and education”, “developmentally appropriate care and education”, “history of early childhood care and education in Japan”. The contents written for the subject of “principle of nursery care and education” were too broad; therefore, the contents of each textbook seemed not to be uniform. Moreover, descriptions of the significance, philosophy and purposes of care and education seemed to be less. It was thought important to explore them further in the future.

Key Words: training of nursery teachers, principle of nursery care and education, contents of teaching, analysis of textbooks